

創世記 第32章 4-9 23-31節

テモテ書二 第3章 14節 第4章 5節

ルカによる福音書 第18章 1-8a節

先週は、納骨式・逝去記念の祈りと逝去記念式を行い、お二人の方の記念のお祈りをささげました。毎年11月1日・2日に行われる教区全体の逝去者記念礼拝は、今年も中止となりましたが、各教会で祈り続ける大切さは変わりません。教会に天国への門があるわけではありません。しかし、わたしたちが逝去された方々を思い続け、天国での再会を信じ続ける限り、この地上での別れへの慰めや、悲しい出来事を超える力を得られるのだと思います。

本日の旧約日課は「創世記」にあるヤコブの物語の一つです。ヤコブがイスラエルと名前を変える機会となったお話です。

アブラハム、イサクと並びヤコブは「創世記」の初期において重要な人物です。しかし、双子の兄弟の兄エサウと仲が悪くなってしまっていました。その背景には、「二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人で野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩りの獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した」(創25:28)という親の事情があります。しかし、「創世記」を素朴に読んでいますと、ヤコブ自身の行動にも、少し狡猾すぎるのではないかと思える部分もありますので、そのことも原因だと思います。

ヤコブは、故郷を離れて叔父ラバンの元に逃れるのですが、そこで20年過ごし、家庭と財産を設けます。そして故郷に帰るところから本日の部分が始まります。ラバンの元でもいろいろなことがあったのですが、今度は仲が悪くなってしまっている、兄エサウと再会しなければなりません。

ヤコブは、使いの者を出して状況を探るのですが、エサウが「**四百人のお供を連れてこちらへおいでになる途中**」(創32:7)という報告を聞きます。それゆえ、下した決断は「**ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、連れてきている人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分けた。エサウがやって来て、一方の組に攻撃を仕掛けても、残りの組は助かると思ったのである**」(創32:8-9)というものでした。兄を信用していません。最悪でも財産が半分残るようには備えたのでした。

そのあとは、ヤコブが主なる神様に祈る場面がありますが、聖書日課では省略されています。祈りの趣旨は、「**どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれませぬ**」(創32:12)というものです。また祈るだけでは

なく、兄エサウに贈り物をすることを決め、「贈り物を先に行かせて兄をなだめ、その後で顔を合わせれば、恐らく快く迎えてくれるだろう」（創 32：21）と対策も考えていました。

聖書日課は、そのあとからの物語です。「その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。」

（創 32：23-25）とある通り、ヤコブはヤボク川で一行の渡河を済ませたあと、対岸でしんがりを務めます。ヤボク川は現在ザルカ川と呼ばれる川で、現在のアンマン方面からヨルダン川にそそぐヨルダン川西岸の川の一つです。その時、正体不明の相手と格闘することとなるのです。

その部分は単純に「そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。」（創 32：25）としか描写されていません。直訳しても「彼は男と夜明けまで格闘した」となるだけです。また「格闘する」という言葉は、『聖書』でもこと次の 26 節でしか用いられていません。それゆえ、具体的にどのような格闘かを詳しく知ることはできません。「レスリング、組打ち、取っ組み合い、相撲」など、素手で戦う状態のようです。なぜ、ヤコブの方が強かったのか、なぜ、夜が明けてはいけないのか、なぜ、相手は「腿の間接」を狙ったのか、いろいろな疑問はありますが、最終的に優勢であったヤコブはその人に祝福を求め、その人から名を聞かれ、「ヤコブ」と答えます。そして、その相手は「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」（創 32：29）と語ります。「イスラエル」という名前が誕生する記念すべき場面です。

この「イスラエル」という言葉は、「戦う」と「神」という言葉から構成されていますが、ここでは「神」と「人々（複数形）」と「戦った」となっていますので、少し話が食い違えます。また「イスラエル」は一般的には「神が戦う」を意味すると解釈されますが、格闘に負けた相手が「神が戦う」という名前を授けるのも不思議なものです。そもそも、その名前をヤコブがいただいた時点で、その相手が誰であるかが不明です。それゆえ、ヤコブは「どうか、あなたのお名前を教えてください」と尋ねるのですが、『『どうして、わたしの名を尋ねるのか』』と言って、ヤコブをその場で祝福した」とあり、その人は名前を伝えないままで、立ち去ったようです。

ヤコブが戦った相手がどのような存在かは、「ヤコブは、『わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている』と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。」という部分で間接的に説明されます。「神様」であったようです。どの神様かという疑問もありますが、「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ」（創 32：10）とヤコブが祈った主なる神様でしょう。そして、人間が主なる神様の顔を見ることについての明

確な言及は、出エジプト記 3 3 章 2 0 節「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」で初めて登場するのですが、ヤコブはここですでに主なる神様を見ることを恐れていたようです。

さて、このヤコブの物語については、いろいろな問いかけをすることができます。本日は、なぜ、主なる神様がヤコブと格闘して負けたのか、そのことを考えたいと思います。もちろん、その問いに対する答えは、この物語自体にはありません。想像するしかないのですが、わたしは、主なる神様がヤコブに勇気を与えるためであったと思います。

それまでの物語の中で描かれているヤコブの姿は、母親リベカの偏愛を受けたからということもありますが、兄エサウとの関係においても、叔父ラバンとの関係においても、狡猾でありまた用心深い人でした。また、「**ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした**」ともありますから、武闘派でもなかったのでしょう。本日の箇所でも財産が半分残るようにと二つに分けるといふほど、慎重でもありました。

主なる神様は、そのようなヤコブに対して、絶対的に負けることのありえない存在でありながら、あえて負けることによって、実の兄を恐れているヤコブに堂々とエサウと対面するための勇気を与えたのだと思います。それは、絶対的な強さを与えられたから生まれる勇気ではなく、弱さをさらけ出すがゆえにもたらされるような勇気です。それは、「**どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれませぬ**」(創 32 : 12) と率直に祈ったヤコブに対する、主なる神様の応えと言えるでしょう。主なる神様は、関係の悪くなった兄と和解するために、それまでの狡猾さを用いるのではなく、また強さを示すのでもなく、正面から向き合わせる勇気をヤコブの与えたのです。聖書日課の範囲を超えますが、この物語は、「**エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた**」(創 33 : 4) とある通り、兄弟の関係が回復するという結末を迎えます。

ヤコブは、人生の成功者といえますが、人間的な価値観でいえば、決して模範的人物とは言えません。むしろ、模範としてはいけない人物といえるかもしれません。しかし、そのような人がイスラエルという名前の始まりとなります。そのようなヤコブの姿から示される事柄は、祈りの大切さであると思います。

人間はどのように行動するべきかと考えたとき、主なる神様に対する祈りがなければ、本当に進むべき道が見出せないのです。そのことは、『聖書』における基本的な課題である、信仰と理性との関係にも結び付きます。『聖書』は、何も考えずにただ信じることを求めません。そもそも『聖書』を読むと

いうこと自体がそうですが、理性的に考えることを求めます。しかし、理性を超えて主なる神様を信じなければ、すべての判断と行動は人間の範囲内でしかありません。信仰だけでも理性だけでもだめなのです。その両者の関係をつなげる事柄が、祈りにほかなりません。大切なこととは、祈りによって導かれることに他ならないのです。

さて、そのような前提で本日の福音書を見てみますと（もう4頁目に入っていますが）、ここでもイエス様の不思議なたとえ話があります。「**イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された**」（ルカ 18：1）と祈りについて教えるために譬えを語っているのですが、内容は、極悪な裁判官が、困っている未亡人に対して、未亡人のことを思ってでもなく、法や正義のためでもなく、自分が煩わされたくないというただそれだけのために裁判をしてやるというお話です。何とも納得のいかない話なのですが、この譬えを聞いて、なんとなく納得がいかないのと思った人は、今何も困っていない人だと、「**人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか**」（ルカ 18：8）と語られるイエス様から言われてしまいそうです。

裁判官が正義のために働いてくれれば一番よいのです。しかし、そうではないとき、裁判が行われなければ生きていけない、生活に困ってしまう人にとっては、裁判がおこなわれることが重要であって、それを行う人の意思は関係ない。譬え話はそう語っているのです。そこから、主なる神様は、この裁判官のような方ではないのだから、主なる神様に絶えず祈りなさい、求めなさいとイエス様は教えているのです。

ここから教えられることは、教会に集められるわたしたちは、この未亡人のように、心から必死に、平和を望み、人権が守られることを望んでいます。祈っていますかということです。それらが実現しなければ、生きていけないと思っていますかということです。

わたしは、政治的に偏りのある平和活動や抗議運動、他者を厳しく批判する人権活動は、教会の歩みにはあまりふさわしいとは思いません。教会のなすべきことは、本日の聖書日課が示す通り、必死に祈り続けることだと思います。祈るだけで何になるという批判もあるかもしれませんが、まだ平和な状態にある日本という場の教会だからこそ、その教会が一生懸命に世界の平和のために祈り続けている姿を示すことが大切だと思います。祈り続ければ、『聖書（旧約）』の物語において、人間の思いを超えた出来事を起こした、主なる神様が必ず応えてくださる、何かの道を備えてくださる。そのように改めて信じたいと思います。これからも共に礼拝の中で一緒に、あるいはそれぞれの生活の中で、ご一緒に祈り続けたいと思います。